

4つの附属小学校の教育実習指導と実習生の成長 —授業実践に焦点を当てて—

櫻井 眞治◎（東京学芸大学教育実践研究支援センター教育実習指導部門）

齊藤 和貴○（東京学芸大学附属小金井小学校）

山田 剛史（東京学芸大学附属竹早小学校）

三大寺敏雄（東京学芸大学附属大泉小学校）

岸野 存宏（東京学芸大学附属世田谷小学校）

代表者連絡先：sakurai@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】教育実習の質の向上、授業実践、実習生の成長、成長の要因、モデル指導計画

1. はじめに

大学における教員養成の質保証を求める動きの中で、教育実習の質の向上を図ることは、喫緊の課題である。そして、本学の中期目標にも、「附属学校における教育実習の質の向上を目指す改善案を策定し、実施する。」と述べられている。本学には、4つの附属小学校があり、現在小学校教員免許必修の学生約400名が、3年次に教育実習（基礎実習）を行っている。このような背景を踏まえて、本研究の動機は次の2点である。

まず、4つの附属小学校の教育実習指導の内容と、授業実践を通じた実習生の成長の事実を明らかにし、大学と各附属小学校において共有化することである。これまでも、教育実習における評価の研究によって、指導内容と評価規準の共通化が図られてきた。中でも、授業実践をめぐる指導は、基礎実習において重視していることであり、指導教諭の具体的な指導とともに実習生の成長の事実がある。しかしながら、そのような事実が明らかにされず、共有化されていないという現実がある。

また、昨年度入学生より小学校教員免許必修学生の100名増加という状況の中で、教育実習の質の向上という課題解決への手がかりを提供する必要がある。

本研究の成果の発信によって、次の可能性が考えられる。まず各附属小学校におけるよりよい指導計画の作成が可能になる。また、本学教員にも附属小学校における指導の実際と実習生の変容のプロセスが伝わり、大学と附属が連携した教育研究への道が拓かれていく。さらには、この先教育実習に臨む学生にとって、先輩の成長していく姿と指導教諭の指導の事実にふれ、実習への見通しを描き、問題意識を高めるものとなる。

2. 本プロジェクトの目的

- (1) 授業実践をめぐる実習生の成長とそれを支えた要因について、明らかにする。
- (2) 4つの附属小の教育実習指導の内容について明らかにし、他校のよさを取り入れてよりよい指導計画モデルプランを作成する。
- (3) 教育実習の「質の向上」を支える指導について考察し、大学、附属校、外部に提言する。

上のねらいの(1)と(2)は、2年間共通のねらいである。(3)は、1年目の研究を振り返る中で2年目のねらいとして引き出されたものである。

3. 本プロジェクトの実施

3.1 教育実習生の成長とその要因の考察

(1)ある実習生の成長とその要因の考察 (5名)

下の表1は、5名の実習生の成長とその要因の考察について、整理したものである。

*下線は、筆者による。太字は、成長。下線は、その要因である。

A 生 ・ 男	指導教諭の授業を参観し、「子どもの声が学習課題になる」という事実に影響を受け、そのような授業を目指して取り組んでいく。その過程で難しさを実感していくが、自身の授業で「 <u>それをやってみてみたい!</u> 」という子どもの声が出されたことに、手ごたえを感じていく。そして、目指したい授業として「 子どもたちの手によってつくりあげていく授業 」を挙げていく。
B 生 ・ 女	最初の授業では簡単に指導案を変えてしまった。また、子ども全体に視線を向けていなかったりしたこともあったが、 <u>仲間と指導教諭の指摘</u> を得ることで自身の課題に気づいていく。そして、最終週の自身の専攻の授業では、 ねらいが明確で子どもの考える意欲を引き出す授業 を展開する。
C 生 ・ 男	当初は子どもの側になかなか立つことができず、どんどん授業を進める傾向があった。しかし、 <u>子どもからの「先生、何言ってるの? (発問の意味がわからない!)」という指摘や、指導教諭との教育観等についての話し合い、他の実習生の授業を参観することを通して</u> 、少しずつ子どもの目線で 指導案を立案し、授業を展開する ようになっていく。
D 生 ・ 女	「子どもの目線に立つ」というテーマをもって取り組み、 <u>指導教諭の指導とその姿勢</u> から学び、「 授業は目の前の子どもとつくる 」ということを実感していく。その一方で授業実践を通して、 教師の授業構想と「子どもとつくる」ことの実現をどのように図っていくかという課題をもつ 。
E 生 ・ 男	当初は、自身の立てた学習指導案と子どもとの食い違いを減らす方向で授業を展開しようとしており、自身の求める反応を引き出すために子どもへの問い返しが多く見られた。しかし、 <u>その問い返しによって子どもの反応が止まったという経験、指導教諭や実習生仲間からの指摘、仲間と協働して子どもの実態を中心に据えて授業づくりを行ったこと</u> によって、予想しなかった発言が他の子どもの思考や授業の雰囲気により影響を与えることを経験した。その結果、 子どもの考えを受容して授業を進める姿が見られ、「食い違いは、必ずしも悪いものではない」という考えに至った 。

表1 5名の実習生の成長とその要因の考察

(2)他の実習生の成長の傾向 (18名)

以下は、他の実習生の成長の傾向についてとらえたものである。

・子ども理解と教材の構造の把握がより深まることで、学習指導案の指導上の留意点が詳しく書けるようになる。また、子どもが考える時間を取ったり、子どもの発言を生かして展開したりするようになる。

(6名)

・実習日誌の記述に、「教師の言葉への着目から、子どもの言葉への着目」が多く見られるようになり、「子どもとの相互行為としての授業」という授業観に至る。(7名)

・授業を通じた具体的な指導を通して、指導教諭の「授業観」に関わる言葉を強く受けとめる傾向が見られる。(5名)

3.2 附属小学校教育実習モデル指導計画案 —授業実践に焦点をあてて—

下の表2は、本研究によって得られた知見を教育実習の3週間の中に位置づけたものである。

	ねらい	学校における指導	学級（学年）における活動
オリ	配当学級の子ども、指導教諭、仲間の実習生と出会い、実習への課題をつかむ	<ul style="list-style-type: none"> ・授業参観 ・模擬授業 ・指導講話 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介、参観した授業についての感想交流 ・学級経営の重点の提示 ・実習までの課題の提示（入口レポート、指導単元、皆で一つ授業をつくってくる、絵本の読み聞かせ等）
自由参観	学級の子どもの様相や指導教諭の願いについて理解を深める		<ul style="list-style-type: none"> ・授業を参観し、指導教諭と子どものこと、学級づくりや授業づくりのことについて話し合う。
実習1週目	子ども理解を進める。初めての授業への準備を進める。仲間の実習生と学び合う雰囲気、関係性をつくっていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・就任式 ・指導講話 ・授業参観と協議 	<ul style="list-style-type: none"> ・作成してきた指導計画、学習指導案の検討 ・授業記録の取り方と、記録をもとにした協議 ・座席表を活用した子ども理解 ・実習日誌を見合う、子どもの学習感想を分担して座席表に記入する、模擬授業等の協働作業を行う。 ・皆で一つの授業をつくる。
実習2週目	授業づくり、授業実践、協議を仲間と進める中で、自身の成果と課題を明確にして、次の授業に挑戦する。	<ul style="list-style-type: none"> ・中間の集会 ・他学級、他学年参観 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案における「指導上の留意点」の詳細化の指導 ・授業実践と、授業記録をもとにした協議 (よさ、課題、改善案) ・中間の自己評価 *実習日誌の評価項目をもとにして自身の成果と課題を明確にする。 ・自身の課題を明確にした授業実践と、次の授業への課題の明確化
実習3週目	自身の問題意識を大事にした授業、一人ひとりの子どもに目を向けた授業に挑戦し、実習の成果と課題をとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> ・研究授業と協議 ・離任式 ・指導講話 ・後片付け 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの子どもやグループの様相と、教材の価値をとらえ、子どもが生きる授業づくりを進める ・研究授業と協議会を通して、自身の成果と課題を明確にする。 ・子どもとお別れ会 ・課題の確認（出口レポート、座席表提出） *座席表には、3週間を通した一人ひとりの子どもへの気づきを記入する。
その後	子どもや学級の成長を見続け、関わる。		<ul style="list-style-type: none"> ・社会科見学、学習発表会等への参加 ・参観の継続 ・公開研究会への参加

表2 附属小学校教育実習モデル指導計画案 —授業実践に焦点をあてて—

4. 研究の成果と課題

(1) 教育実習生の成長とその要因の考察

教育実習生は、次第に子どもの側に立って授業を構想し展開するようになり、学習指導案にはねらいの明確化や指導上の留意点の具体化が見られるようになる。そしてその過程で、目指したい授業像が形成されていく。このような成長の要因は、指導教諭の授業や指導、子どもの反応、仲間からの指摘、他の実習生の授業の参観である。

(2) 附属小学校において教育実習の質の向上を図る指導

- ①実習生に協働的・作業的な学びの場を設け、学び合える集団にしていく
- ②初めての授業の前に、実習生が子どもに絵本の読み聞かせをする
- ③実習生が授業記録を取って授業を参観し協議する。指導教諭の取った授業記録を配布する
- ④児童理解と教材研究に基づいた学習指導案の「指導上の留意点」の詳細化の指導を行う
- ⑤その実習生の問題意識や特徴をとらえて指導する

(3) 大学において教育実習の質の向上を図る指導

- ①学生が授業実践をする前に、授業者の営みを疑似体験できる場を設ける
- ②教育実習において指導する単元（教材）の魅力についての徹底した事前研究
- ③希望する学生が附属小を参観できるようにする
- ④附属小の授業を参観した後に、大学でその授業について協議する場を設ける
- ⑤学生の授業観や教育観を揺さぶる場を設ける
- ⑥附属小の公開研究会に、大学教員や学生の参加を促進していく

(4) 「観て学ぶ」と、自身の子ども観、授業観、教師観を問い直すこと

小学校教員養成課程学生の 100 名増加という中であって、教育実習の質の向上をどのように図っていけばよいだろうか。

まず、「観て学ぶ」ということの重視である。実際に「授業をして学ぶ」から返ってくるものは大きく、それに替えられるものはない。しかしながら、実習生数が増加すれば、一人あたりの担当授業数は減ってくることになる。だからこそ今後は、「観て学ぶ」が一層重視されてくるのである。「観て学ぶ」ことが自身の授業に生きることは、たくさんある。例えば、ある子どもが授業中に活動していないようであるが、授業者はそのことに気づいていない。だから、自分が授業をする時は、この子に目をかけ、時には声をかけながら展開していこう。勿論、この子が取り組みたくなるような教材や活動を工夫してみよう。このように、他の実習生の授業を観ることによって、自身の授業への実践課題が明確になるのである。

そして、「観て学ぶ」を自身に生きるものにするためには、授業記録を取って授業を観ることである。そして、その記録の中の具体的な子どもの姿と教師の姿から、授業のよさ、課題、改善案を考え合っていくことである。だからこそ、大学において附属小の授業を参観した後も、ぜひ参観者が自身の授業記録をもとにして語り合う場を設けたい。

もう一つは、学生に自身の子ども観、授業観、教師観について問い直す場を設けることである。本研究の成果として、「教育実習を通して実習生に目指したい授業像が形成されていくこと」が挙げられている。このような「自分はどんな授業を目指したいのか？」ということは、「自分は、子どもをどのような存在としてとらえているのか?」、「教師とは、子どもにとってどのような存在であるのか?」という、子ども観、教師観とも密接に関わっている。だからこそ、様々な授業、それを支えている考え方との出会いを通して、自身の観方を問い直す場、新たな観方を生み出す場を、大学においても、教育実習の場においても重視していきたい。